

平成30年3月23日(金)

老球の細道400号

ボールは友達以上恋人未満

会津バスケットボール協会 室井 富仁

今は昔、国際サッカー連盟とアデダス社は2014年ワールドカップ・ブラジル大会で使用する公式球を発表した。使用球の発表が世界的なニュースになってしまうからサッカーの人気は凄い。しかも使用球には「ブラズーカ」という名前までつけた。ブラズーカとはブラジル国民の生き様を誇りを持ってあらかず言葉だという。ボールにまで哲学的な意味合いをこめてしまうこの発想には驚かされる。そしてうらやましい。

サッカーボールは革命的な進化を遂げている。我々中高年世代が親しんできたサッカーボールというと五角形と六角形の皮で構成された20面体の構造である。これは日本のバスケットボール製造でも有名な「モルテン」社が古代ギリシャの数学者アルキメデスの「アルキメデスの多面体」からヒントを得て開発したそうである。スポーツのボールとアルキメデスがコラボレートする。ここにもケミストリー（化学反応）が現われる。

2006年のドイツワールドカップまでは20面体皮張りが主流であったのが、それ以後突然ボール革命が起こった。それまで主流だった五角形と六角形20面体の革張りから、ひょうたん型の皮6枚と芝刈り機の歯のような型の皮6枚の計14枚で構成されたより真球に近い構造のボールが作られワールドカップに採用された。そして2014年の「ブラズーカ」は6面体とさらに少なくなったのである。

これは、サッカーボールがより真球に近い形に進化することにより空気抵抗の影響を軽減するためである。それによりボールを芯でとらえれば回転しない“ブレ玉”を蹴ることができ、また回転をかけるキックをすると曲がりやすくなるという。このようにボールの形式を変えるだけでプレーがさらに多彩になり、ゲームそのものの面白さがさらに高まる。バスケットボールでも今までの8面体から16面体のボールへの移行があり、スピンなどに影響を与えてシュートの確率アップに効果を上げている。スポーツは道具の進化によって、スキルや競技力にも大きく影響を受ける。

フットボールができた当初のボールは「ふくらませ球」といって単に動物の膀胱などに空気を吹き込みふくらませたものを使っていた。やがてこれに革のバックをかぶせて補強したものが使われた。現在の丈夫で弾力性に優れたボールが誕生したきっかけは、19世紀のイギリスでゴム加工技術が進歩を遂げたことによる。19世紀末にイギリスの獣医であったダンロップ氏が自分の息子の誕生日に自転車をプレゼントした。乗りやすくするために世界で初めて空気入りのゴムチューブタイヤを考案した。この空気入りゴムチューブが後に自転車とスポーツのボールに革命を起こすことになったのである。ダンロップとはご存じ車のタイヤとかゴルフボールなどで有名なあのダンロップである。

私の高校時代、革ボールは貴重品であった。少ないボールを大切に使うために指につばをつけてボールの汚れを落とし、その後オイルを塗って大事に大事に使った。家にボールを持って帰りその作業をした。今思えばその作業が自然とボールへのタッチとフィーリング養成に役立っていたのかもしれない。ボールと一緒に布団に入り、教室にもボールを持ち込み、いつでもボールと一緒にネクラな高校生だった。友人や家族と一緒にいる時間よりもボールと一緒にいる時間のほうが長かった古き懐かしき青春のひとつまでである。